

学長候補適任者推薦書  単独推薦  
 連名推薦

令和元年6月10日

国立大学法人山形大学  
学長選考会議議長 殿

推薦(代表)者氏名 佐藤 慎哉(自署)

私は、本人の承諾を得て、下記の者を国立大学法人山形大学学長候補適任者として、関係書類を添えて推薦します。

記

久保田 功

- (注) 1. 推薦方式について、本書類名称の右側にある「 単独推薦」又は「 連名推薦」の何れかにチェックを入れること。  
2. 連名で推薦する場合は、推薦代表者が本書類を作成すること。  
3. 用紙は、日本工業規格A4判・縦型とすること。

## 推薦者名簿

学長候補適任者氏名 久保田 功

| No     | 所属等                 | 職名   | 推薦者氏名 |
|--------|---------------------|------|-------|
| 1 (代表) | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 佐藤慎哉  |
| 2      | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 欠畑誠治  |
| 3      | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 石井邦明  |
| 4      | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 浅尾裕信  |
| 5      | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 齋藤貴史  |
| 6      | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 櫻田香   |
| 7      | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 山口浩明  |
| 8      | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 川前金幸  |
| 9      | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 山川光徳  |
| 10     | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 鈴木民夫  |
| 11     | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 北中千史  |
| 12     | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 真弘光章  |
| 13     | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 上野昌之  |
| 14     | 学術研究院(大学院医学系研究科主担当) | 教授   | 高木理彰  |
| 15     | 医学部附属病院 看護部         | 看護部長 | 斎藤律子  |

- (注) 1. 単独での推薦の場合は、本名簿の作成は不要とする。
2. 「所属等」「職名」及び「推薦者氏名」欄は、全て自署によるものとし、名簿の先頭 No1(代表)には推薦代表者が記入すること。
3. 役員は「職名」と「推薦者氏名」欄のみ記入し、経営協議会委員は「所属等」には「経営協議会」、「職名」欄には「委員」と記入すること。また部局長は「職名」欄に当該部局長名を記入すること。
4. 教員にあっては、「所属等」欄については所属と主担当教員として配置された教育研究組織等を記入すること。【例：学術研究院(人文社会科学部主担当)】
5. 用紙は、日本工業規格 A 4 判・縦型とすること。

## 推薦理由書

学長候補適任者氏名 久保田 功

久保田功氏は1979年に山形大学医学部を卒業し、直ちに山形大学大学院医学研究科に進学(内科学第一講座)、1983年に修了した(医学博士)。その後、2回の米国留学(ユタ大学、ハーバード大学)を経験し、2002年に山形大学教授(医学部内科学第一講座)に就任した。久保田氏は内科学第一講座を、教育、研究、診療のいずれの領域においても、医学部でもっとも充実した教室の一つに成長させた。また、担当であった循環器内科、呼吸器内科、腎臓内科における優れた研究業績により、日本学術会議連携会員に任命されている(第24期-25期)。

2007年に教育研究評議会評議員となり、2010年度から2015年度までの6年間にわたり医学部附属病院長を兼務した。附属病院長の時代は病院再整備時期と重なり、しかも‘居ながら改修’のため多くの解決すべき課題があったが、久保田氏の強いリーダーシップの下、優れた機能(疾患別病棟構成、病院全体の効率的な動線等)を持つ新病院を完成させた。彼が発案、実行した取組である、病床数の増加(604床から637床)、県内他病院で医学生が教育を受ける広域連携臨床実習、研修医レジデントハウス建設、立体駐車場建設、ハイブリット手術室設置などは、現在の附属病院発展の基礎となっている事業である。

2016年4月からは医学部を離れ、理事・副学長(研究・評価・病院担当)として全学のマネジメントに関わっている。第2期中期目標期間報告書や第3期中期目標期間年度評価における高い評価、山形大学先進的研究拠点(YU-COE)事業の順調な発展、医学部附属病院の安定した経営に貢献するところは大きいと考える。2017年度には文部科学省「イノベーション経営人材育成システム構築事業」、政策研究大学院大学「大学トップマネジメント研修」に参加し、多様な学問領域からなる大学組織全体の経営を学んだ。とくに、カリフォルニア大学サンディエゴ校とシンガポール国立大学での海外長期プログラムや海外の著名大学の学長経験者等とのワークショップを通じて、大学経営に関しての国際的視野を広げた。

久保田氏は、山形大学教授、医学部附属病院長としての実績等から、優れた学識、的確な目標を設定し実行する能力、強いリーダーシップを有することが明らかである。また、理事・副学長となってからは大学経営に専念し、「大学トップマネジメント研修」に参加するなど、大学経営に関する国際的視野を広め、大学全体を俯瞰する能力を高めてきた。人格も高潔であり、コミュニケーション能力も高く、必要な大学改革に積極的に取り組むことができ、社会からの理解と支持を得るための積極的な情報発信を行うことができる人材と考える。

以上より、久保田功氏を国立大学法人山形大学学長候補適任者として推薦する。

- (注) 1. 推薦理由は、学長選考基準を踏まえ、1,200字以内で作成すること。  
2. 用紙は、日本工業規格A4判・縦型とすること。

同 意 書

私は、国立大学法人山形大学学長選考等規定大5条第4項に規定する学長候補者として推薦されることに同意します。

日 付 2019 年 6 月 10 日

氏名(自署) 久保田 功

## 学長候補補適任者の経歴・業績書

|               |                        |
|---------------|------------------------|
| (ふりがな)<br>氏 名 | (くぼた いさお)<br>久保田 功     |
| 生 年 月 日       | 1954 年 8 月 16 日 (64 歳) |
| 現 住 所         | 山形県                    |
| 最 終 学 歴       | 山形大学大学院医学研究科修了         |

## 経歴及び業績

| 年 月 日     | 事 項  |
|-----------|--|
| ・経 歴      |  |
| 1979年 3月  | 山形大学医学部卒業 (6月医籍登録)                                       |
| 1983年 3月  | 山形大学大学院医学研究科修了 (医学博士)                                    |
| 1983年 4月  | 山形大学医学部附属病院医員 (第一内科)                                     |
| 1983年 6月  | 山形大学医学部附属病院助手 (附属病院第一内科)                                 |
| 1983年 7月  | 山形大学医学部助手 (内科学第一講座)                                      |
| 1986年 7月  | 米国ユタ大学留学 (～1987年6月、この間休職)                                |
| 1989年 12月 | 山形大学医学部附属病院講師 (第一内科)                                     |
| 1992年 6月  | 山形県立中央病院医長 (内科)  |
| 1993年 4月  | 山形大学医学部附属病院講師 (第一内科)                                     |
| 1994年 7月  | 山形大学医学部助教授 (内科学第一講座)                                     |
| 1997年 5月  | 米国ハーバード大学出張 (～1998年3月、文部省在外研究員)                          |
| 2000年 10月 | 置賜広域病院組合医師   |
| 2000年 11月 | 公立置賜総合病院医長 (内科)  |
| 2001年 5月  | 公立置賜総合病院診療部長 (内科)  |
| 2002年 1月  | 山形大学医学部教授 (内科学第一講座)                                      |
| ～2016年 3月 | (2015年4月より所属は学術研究院)                                      |
| 2010年 4月  | 山形大学医学部附属病院長   |
| ～2016年 3月 |  |
| 2007年 9月～ | 山形大学教育研究評議会評議員   |
| 2010年 4月～ | 山形大学経営協議会委員  |
| 2016年 4月～ | 山形大学理事・副学長 (研究・評価・病院担当)                                  |
|           | 現在に至る  |
| (学会等)     |  |
| 1979年～    | 日本内科学会会員 (現評議員)  |
| 1979年～    | 日本循環器学会会員 (現代議員、2016～2017年度理事)                           |
| 2017年度    | 文部科学省「イノベーション経営人材育成システム構築事業」、政策研究大学院大学「大学トップマネジメント研修」に参加 |
| 2017年10月～ | 日本学術会議連携会員 (第24期-25期、分野：臨床医学)                            |
|           | 日本学術会議東北地区会議運営協議会委員 (第24期)                               |

・業績

主に循環器、呼吸器、腎臓内科に関する英文論文 398 編 (15 編を抜粋記載)

- ① Sex differences in impact of coronary artery calcification to predict coronary artery disease. *Heart*. 2018;104(13):1118-1124.
- ② Midkine deteriorates cardiac remodeling via epidermal growth factor receptor signaling in chronic kidney disease. *Hypertension*. 2016;67(5):857-865.
- ③ Impact of gender on the prognosis with nonvalvular atrial fibrillation. *Am J Cardiol*. 2014;113(6):957-962.
- ④ A novel mouse model of aortic valve stenosis induced by direct wire injury. *Arterioscler Thromb Vasc Biol*. 2014;34(2):270-278.
- ⑤ The impact of renal tubular damage, as assessed by urinary  $\beta$ 2-microglobulin-creatinine ratio, on cardiac prognosis in patients with chronic heart failure. *Circ Heart Fail*. 2013;6(4):662-668.
- ⑥ Higher plasma renin activity is a risk factor for total mortality in older Japanese individuals:the Takahata study. *Metabolism*. 2012;61(4):504-511.
- ⑦ Trends in coronary risk factors among patients with acute myocardial infarction over the last decade: The Yamagata AMI registry. *J Atheroscler Thromb*. 2010;30;17(9):989-998.
- ⑧ Pentraxin 3, a new marker for vascular inflammation, predicts adverse clinical outcomes in patients with heart failure. *Am Heart J*. 2008;155(1):75-81.
- ⑨ Prevalence and risk factor analysis of microalbuminuria in Japanese general population. The Takahata study. *Kidney Int*. 2006;70(4):751-6.
- ⑩ Cardiac-specific overexpression of diacylglycerol kinase  $\zeta$  prevents Gq protein-coupled receptor agonist-induced cardiac hypertrophy in transgenic mice. *Circulation*. 2006;113(1):60-66.
- ⑪ A novel polymorphism in secretory phospholipase A2-IIID is associated with body weight loss in COPD. *Am J Resp Crit Care Med*. 2005;172(9):1097-1104.
- ⑫ Toll-like receptor-2 modulates ventricular remodeling after myocardial infarction. *Circulation*. 2003;108(23):2905-2910.
- ⑬ Intracoronary flecainide induces ST alternans and reentrant arrhythmia on the intact canine heart. A role of 4-aminopyridine-sensitive current. *Circulation*. 1999;99:1639-1643.
- ⑭ Significance of discordant ST alternans in ventricular fibrillation. *Circulation*. 1990;82:2185-2189.
- ⑮ Detection of diseased coronary artery by exercise ST-T maps in patients with effort angina pectoris, single-vessel disease, and normal ST-T wave on electrocardiogram at rest. *Circulation*. 1989;80:120-127.

## 大学の運営等に関する所信書

氏名 久保田 功

### (1) 現況分析

国立大学法人は第3期中期目標期間にあるが、期間途中で運営費交付金の配分に係る評価法等が大きく変更された。成果を中心とする実績に基づいて配分される割合が増大し、かつ大学間の配分格差が拡大される方針が示されており、第4期では今まで以上に厳格な大学評価が実施されることは明らかである。少子高齢化の影響も不可避で、現状に安穩としていては、大学自体の存続すら危ぶまれることとなる。社会や時代の変化を的確に捉え、大学の機能を最大限に発揮するための明確な目標と戦略を立て、確実に実行しなければならない。

### (2) 大目標

山形大学の使命と基本理念に従い、「山形に立脚し世界に影響力をもつ総合大学」であることを基本的な目標とする。山形大学は、東北地方では東北大学に次ぐ規模を誇る総合大学であるが、全国的なランキングは必ずしも高くない。大学の将来を見据えれば、社会、世界における山形大学の存在感を向上させ続けることが必須である（10年後に国内トップ20を目指す）。

### (3) 教育・研究

2015年4月に全教員の所属を学術研究院に一元化したことにより、学部教育面では、最適な教員の配置が可能になり、全学的な観点から教育課程の体系化や組織的な教育の実施が可能となった。今後も教育方法の見直し、改善を継続的に実施する。さらに、教育効果を高めるため、学生側の意識を一新させ、外国と比べて極めて少ないと言われる日本の大学生の勉学（座学に限らない）に割く時間を増すことを目標に含める。これらの取組みにより、グローバル社会で活躍できる人材を育成する。優れた卒業生の輩出は、山形大学の使命の根幹に関わる事項であり、山形大学の名声を高めることにつながる。また、寄附講座を活用し、教育・研究水準のさらなる向上を図る。

現行の大学院研究科においては、専ら各学部の上位にある組織として運営されており、総合大学のメリットが生かされていない。そこで、研究科改組に向けての準備が全学体制で行われている。これは、キャンパス内（小白川）及びキャンパス間（小白川、飯田、米沢、鶴岡）の連携を強化し、大学院の活性化を図ろうとするものである。この大学院改革を実施し、幅広い文系、理系学部を有する総合大学としての強みを活かして文理兼修と異分野連携を軸とする教育・研究を実施することにより、国を支える人材を育成する。

山形大学先進的研究拠点（YU-COE (S)）として現在5拠点がある（有機エレクトロニクス、分子疫学、山形大学ナスカ研究所、総合スピン科学、ソフトマテリアル創成）。新たに幾つかの特色ある研究グループに対して研究費の重点支援を行い、世界をリードする研究拠点（YU-COE (S)）へと発展させ、大学の研究の新たな牽引役とする（農・工・地教を中心とした「食の研究」、医・理・工・農を中心とした「創薬研究」等）。

大学の発展は教員の資質と能力に大きく依存する。どのような教員を採用するかによって大学の将来が決まるといってよい。各学部が真に必要な分野における最適な人材を採用する。若手が少ない現状を鑑み、将来性のある若手を優先する。また、教員活動の活性化を図るため、教員の教育・研究等に係る諸活動の点検・評価を着実に実施する。

#### (4) 社会貢献

山形大学は山形県全体を基盤とし、東北地区とくに南東北に強い影響力をもち、さらには特定分野で世界ないし全国を牽引するという立ち位置にある。現在、各学部で数々の特色ある取組を実施しており、本学の社会貢献は相当高いレベルにある。これに満足することなく、教育、研究、社会サービス全般に関して、山形県及び県内自治体、並びに県内企業との連携をさらに強化し、山形県の活性化に貢献する。地域の魅力度向上は山形大学の発展にも必要不可欠である。また、山形大学の社会貢献を周知するため、より一層の情報発信が必要である。

小白川キャンパスで検討されているエクステンションセンター（各学部で行われている地域への教育・研究サービス等を統合し、組織的に展開）は地域、社会の教育研究ニーズに積極的に応えるもので、社会に向けて山形大学のアピールにも効果的であり、速やかに本格的な運用を始めたい。医学部では、ゲノム医療提供体制の構築や独自に開発した重粒子線治療装置の活用を通して、世界最先端の医療を提供するとともに、地域と一体となった医療都市の形成や医療インバウンドの推進により、地域社会を活性化させる。工学部を中心に産学官連携事業についての優れた実績があるが、オープンイノベーション推進本部の活用等を通して、より一層の大型共同研究の創出を目指す。農学部の農作物や家畜の生産・加工技術の開発等は地域貢献の柱となる事業といえる。

#### (5) 管理運営

国立大学法人化後、山形大学の予算規模は増加しつつあるが、国からの運営費交付金は減少の一途をたどっている。山形大学の収入総額に占める運営費交付金の割合をみると、法人化初年度（2004年度）には42%であったのに対し、2018年度には24%まで低下している。このように現在では、以前のように基盤的経費の殆どを運営費交付金に依存することは不可能な状況となっている。

運営費交付金が削減される中、財務基盤の強化なくして、「学問の自由」「大学の自治」といった大学の自立性を担保し、大学のアクティビティを維持（向上）することはできない。優れた研究を遂行するためには、自己資金による研究施設の整備も必要となる。したがって、経費の節減に加え、運営費交付金以外の収入をより一層増加させることが不可欠であり、同時に新規収入源の開拓、収入源の多様化を常に念頭におく必要がある。産学官連携を一層推進し収入を増加させ、寄附講座の設置に向けた取組みを積極的に行う。ファンドレイズ専任の外部理事を採用する等の施策により、卒業生、地域の個人や企業等からの寄付を集める体制を整備し、恒常的に相応の収入が見込めるようにする。

国の財政難や少子化に伴う大学再編・統合の動きも具体化しつつあり、他の国公私立大学との教育面での連携や山形大学を中心とした県内高等教育機関の統合も視野に入れておく。

#### (6) おわりに

山形大学の使命と基本理念に沿って、山形に立脚し世界に影響力をもつ総合大学であることを目指す。地域との係わりにおいては、豊かな人間性と高い専門性を有する若者を育成し地域に定着させ、産業界との密接な連携により地域経済に貢献し、アカデミア・医療・文化の中心としての役割を果たす。この機能を果たした上で、世界を牽引できる特定の分野の育成を図り、国内外における山形大学の存在感を高める。

このためには、すべての学部（人文社会科学部、地域教育文化学部、理学部、医学部、工学部、農学部）の存在感を高めることが必要であるが、その方策は学部毎に異なる。各学部の意向を尊重して具体的目標を設定し、コミュニケーションを大切にして設定した目標を着実に実行し、山形大学の更なる発展を目指す。